

2009年7月21日

モンゴル国子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト
最終セミナー（6月20日～6月28日）

東京学芸大学
教授 高畑 弘

1. 日程

- 6月20日（土）成田より UB へ
- 6月21日（日）22日（月）の「算数・数学教育に関するセミナー」での講演の準備
- 6月22日（月）8：00 教育省へ行き、通訳のボルマと打ち合わせ。10：00より初等教育センターにて「算数・数学教育に関するセミナー」始まる。算数・数学のWG以外に、現職教員、学校の管理職、大学の教員など多数。50名ほど。午前中に「日本の学習指導要領の改訂—算数の場合—」と題する講演。午後「日本とモンゴルの教科書の比較」と題する講演。16：00閉会
- 6月23日（火）資料収集
- 6月24日（水）資料収集
- 6月25日（木）終了セミナー9：00よりモンゴル日本センターで始まる。昼食後、算数・数学グループともに教育大学へ移動。それぞれのグループで、プロジェクトの総括と今後の活動計画について検討。16：00ごろから両グループ合同で総括セミナー。質疑応答の形で、筆者の立場からの総括と今後の展望について所感を述べる。17：00終了。
- 6月26日（金）終了セミナー第2日目 Sunjin Hotel にて9：00から始まる。教育省ネルグイ、ナランツェヤ2名から行政面からの総括。各グループに分かれて、今後の全国普及へ向けての方策の検討。昼食。各グループからの報告。感謝状贈呈など。午前中の各グループの検討会の中で、指導要領、教科書の作成過程について日本の状況を話す。
- 6月27日（土）資料等のまとめ
- 6月28日（日）帰国

2. 所感

一応、プロジェクトの最後のミーティングということもあり、だれもがプロジェクトが成功裏に終わることができたということで安堵感を持っているようにみえた。しかし、またその反面ではこれから新しい指導法を全国に普及する仕事が日本側の協力のないところで遂行されなければならないがどうしたらいいのだろうかという不安感は隠しようもなく表情に表れていた。しかし、さまざまな制約条件があり、どのグループからもよい具体策は提示されなかった。そこで、専門家の一人が「子どもの発達を

支援する指導法改善協議会（仮名）」という形で NPO を立ち上げたらどうかという提案をしたが、直ちには行政側は賛意を示さず、会の最後に、その案も面白いという言葉があっただけであった。小生も最初それはとてもよい提案と考えたが、よくよく考えてみると、算数・数学教育に関しては勇み足になるのでは？という危惧が頭を擡げてきた。今回のプロジェクトではいくつかの教科が関わっているが、教科によって歴史も指導法も異なることを念頭において考える必要があるようである。

NPO のような活動が開始されると、算数・数学に関しては、これまで折角培ってきた WG のみなさんの算数・数学教育に関する研究心が逆に胡散霧消してしまうのではという危惧の念がその基底にある。

そもそも、新しい指導法をめぐる様々な条件についての算数・数学 WG の理解がそれほど進んでいない上に、地方のモデル校の試行教員の能力の低さ（全員ではない）を考えるならば、新指導法普及の全国展開など夢のまた夢というばかりでなく、まだ不十分な理解にとどまっているとはいえ無限の可能性をもつ中心メンバーの現在の知識能力をいたずらに消耗させてしまう恐れがあると思われる。

そうしたことから、しばらくは冷却期間において、WG の方々の指導法理解の深化、教材研究の力の向上を図ることが大切に思うのである。そして、地道に、大学の先生は大学での教員養成を通じて、現場の教員は自分の学校での指導法改善に取り組み、それを他の学校の先生にも影響を与えていく。そうした波及効果を通じて普及させていくことを考えた方が逆に現実的ではないかと考えている。もちろん、そうした運動の中で、大学の先生と現場の教員との連携は大切であり、不可欠の条件でもある。

こうした地道な運動の中から自然に NPO 発足ということは十分に考えられるが、最初から NPO 設立ありきという行き方は再考の余地があると思う。

先に述べたことであるが、ここはいったん冷却期間において、じっくり今後のことを検討すべきである。虻蜂取らずにならないように慎重に行動されることを切に思うものである。

今回の最終セミナーに参加して、3年半のプロジェクトがモンゴル国のこれからの算数・数学教育を担う多くの人材を広い範囲で育てるという大きな成果を勝ち得たことを確認することができた。「日暮れて道遠し」の感が深いが、かれらはきっと大きく育って、モンゴル国の教育の改革に邁進していくことを確信している。